

近代熊本とキリスト教（8）

ジェーンズ・熊本洋学校と遠山参良・九州学院

藤本 誠

ジェーンズの教育理念と九州学院の創立の精神「敬天愛人」

熊本洋学校教師L・L・ジェーンズ(L.L.Janes)の教育構想は、ジェーンズが私淑し尊敬していた英国ラグビー・スクールの校長トマス・アーノルド(Thomas Arnold)に倣ったものであった¹⁾。その学風は、「従来のパブリック・スクールの知識の偏重に反対して、宗教的・道徳的原理、紳士の行為、知的能力の三大方針をたて、徳育を首位に、知育を次位におき、徳育と知育との一般的結合を意図²⁾」したものであった。「徳育を主とし、いわゆる自学自習の教育をモットーとして、人格の教育に重きを置き、生徒をことごとく寄宿舎に入れて、校長や教師は舎監となつて、寢食を共にし、全二十四時間の全人格教育を標榜する教育、しかして教師の生活が生徒にそのまま照射し、その薫陶によって、人格の形成を所期する英国のラグビー・スクールの教育信条³⁾」が実施された。知識修得のための教育課程よりも、むしろ、教科修得のための努力や生徒個人の品性の陶冶を重んじた。

全寮制による全人格教育は、ジェーンズの母校ウェスト・ポイント陸軍士官学校の

教育法に倣つて行われた。教科書は英語の原書を使用し、授業はすべて通訳を用いず英語でジェーンズ自ら行った。小崎弘道(第一回生)の回顧にも見られるように熊本洋学校では、成績優秀な先輩が後輩の学習を指導し、自らの学習効果も向上させるといった「自助の教育」が行われていた。封建制が長い間続き、「個人の尊厳、進歩や自由平等の概念といったものが抑圧されており、文明は育たず、物心両面で大変貧困な状態⁴⁾」に置かれていた肥後藩で開明的な教育を施すために、ジェーンズは「自助の教育」を採り入れた。ジェーンズは、次のように記している。

「私はひそかに、この学校は当初から自助の原則——天は自ら助くる者を助く——に従おうと決意した。つまり、しっかり学んだ事は教えることができるというもう一つの原則を実際に適用しようと決心したのであった」

結局、学校を運営していく上で欠かすことのできない助手の役目を、他ならぬ生徒自身に務めさせようとしたのだ。はじめに私が生徒に教える、次にそれを生徒が相互に教え合う、というわけである。このように、学んだことを次に教える



九州学院創立時代の遠山院長

ブルジョアの勤勉立志を説き、「天は自ら助くる者を助く」(Heaven helps those who help themselves.)でことに知られている。

豪放闊達なジェーンズは、洋学校の俊英たちに対し厳格な指導を通して自助の精神を徹底した。その徹底ぶりは徳富猪一郎(蘇峰)とて例外視されず、一回生として入学したものの年齢が不足し学業に見込みなしとして一旦退校させられ、四年後の明治八(一八七五)年に十四歳で五回生として再入学している。一回生の入学生四十六人のうち卒業したのは十一人、二回生は入学生七十二人のうち卒業したのは同じく一人であった。二十人が入学した五回生の

同期には、猪一郎と同じ年の原田助(後・同志社社長、ハワイ大学教授)や蔵原惟郭(後・熊本英学校長、熊本女学校長)、および数え年弱冠十歳の遠山参良(字・参良、後・五高教授、九州学院初代院長)がいた。

という経験は、生徒には貴重な経験になったことと思う。というのは、教えるところ、もつともよく学ぶことだからだ。
そのほか自助の精神にのっとり、日常生活のさまざまな場面で、できる限り自分のことは自分でやるという方針を貫こうとした。(中略)
これがいかに困難なことであったかは前述のとおりである。だが私は生徒相互の間に、学習や指導能力について必要な競争心をかきたてることにより、この問題を解決していった。新しく学習した事項を他人に説明し教授できることだけが、それを完全に習得したことの唯一の証明だという原則を生徒に十分に納得させ、それを実行させた。その達成の状況に応じて生徒間の序列を修正し、それを席順などに反映させた。」

この自助の精神は、一八五八年に刊行されたサミュエル・スマイルズの『SELF-HELP』(『自助論』)に拠っているのは明らかであろう。ひとたび刊行されるや空前の売れ行きで世界各国語に訳され世界的なベストセラーとなった著書で、イギリスの

指導者として、明治四十三（一九一〇）年九月まで五高に奉職し、翌明治四十四年三月、九州学院初代院長に就任。学院創立に尽力した。

明治四十四（一九一〇）年四月、アメリカ南部一致ルートル教会の支援とC・L・ブラウン宣教師（Rev. Charles Lafayette Brown）及び遠山参良初代院長（メソジスト熊本三年坂教会信徒）の尽力によって開校された九州学院の教育は、寄宿舎から始まった。本館の竣工が開校に合わなかったこともあるが、熊本洋学校同様、生徒は教師と寝食を共にし、直接薫陶を受けた。第一回生は百二十二人（各三十人の四クラス）が入学したが、五年後の大正五（一九一六）年三月卒業したのは四十二名という厳しさであった。そのうち十七名がブラウンから受洗



九州学院全景（昭和初期）

こうした熊本洋学校の教育理念は、九州学院の建学の精神にも通じるものがある。初代院長・遠山参良の熊本洋学校での学びは一年間であったが、その後、明治九（一八七六）年九月、三回生の岡田松生³に引き連れられて同志社に入学し、熊本バンドの英傑たちの下で二年間学んだ。さらに熊本洋学校の教育理念を引き継ぐ広取⁴学校でも明治十二（一八七九）年九月から一年間学び、翌年九月から一年間は郷里の鏡英学校（私学岡田英学校）で英語及び漢学を修めている。遠山参良は多感な少年期にキリスト教主義人格教育の影響を受け、その自助の精神を根付かせたに違いない。

その後、遠山参良は明治十七（一八八四）年九月、長崎県の私立加伯利⁵英語学校（後の鎮西学院）に入学し、明治二十一（一八八八）年同校英語普通科卒業後教職に就く。明治二十五（一八九二）年五月から五年間、米國オハイオ・ウェスレヤン大学に留学し、理学修士（Master of Science）の学位受領後帰国。母校鎮西学院の教職に復帰した。明治三十二（一八九九）年七月、遠山は第五高等学校英語科主任教授・夏目金之助（漱石）の面接を受け、五高英語科講師招聘を受諾。翌月赴任し、明治三十三（一九〇〇）年一月教授を拝命。花陵会（第五高等学校基督教青年会）及び龍南会演説部の中心的

し、路帖^{ろてつ}熊本教会（現・日本福音ルーテル熊本教会）の信徒となった。

九州学院開校三年目の大正三（一九一四）年四月、遠山院長が「敬天愛人」を校訓に定めた。すでに開校以来提唱され定着していた「己れ自ら監督し、役に立つ善人たれ」（自助精神）の九学スピリットを象徴的に表わし、根幹となる語（四字成句）として定めたのである。遠山院長が召天するまで講師を兼任し教鞭を執った第五高等学校は「剛毅朴訥」をモットーとしていたが、「敬天愛人」はキリスト教主義学校・九州学院の建学の精神として実にふさわしいものであった。

西郷隆盛愛誦の語「敬天愛人」が九州学院の校訓（＝建学の精神）となった経緯は、大正二（一九一三）年に行われた最初の県外修学旅行で、引率者の教頭藤井寅一（国語・修身、元・聖公会伝道師）が、西郷が揮毫した書の石摺りを持ち帰ったのがきっかけである。遠山院長が修学旅行団のことを事前に連絡していたのであろう、メソジスト鹿児島教会（鹿児島市山下町三二一）の柳原直人牧師から藤井教頭がもらって来たのである。そして大正三（一九一四）年四月、遠山院長が校訓として定め発表したのであった。

しかしそれによって、「西郷南洲遺訓」に表明された西郷の敬天思想及び陽明学的人倫思想を九州学院の人格教育に採り込んだというのでは断じてない。「敬天愛人」が、九州学院のキリスト教主義人格教育の理念を象徴的に表わす標語として、援用するにふさわしいものであったのである。そもそも「敬天愛人」は西郷隆盛が最初に用いた四字成句ではなかった。

諸橋轍次博士の「大漢和辞典」の「敬天愛人」という項には、「天をうやまひ、人を愛する。西郷南洲の語」と解説があり、「道は天地自然のものなれば、講学の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに克己を以て終始す可し」という「西郷南洲遺訓」の中の一文を引証している。しかしこの「西郷南洲の語」（西郷の造語）というのは間違いで、西郷が愛誦し揮毫した語（四字成句）と解すべきである。

「遠山参良先生蔵書遺本」（九州学院所蔵）の中に、サミュエル・スマイルズ（SAMUEL SMILES）の著書『SELF-HELP』（『西国立志編』）・『自助論』と『CHARACTER』（『西洋品行論』・『品行論』）の洋書がある。遠山参良院長が愛読し、第五高等学校や九州学院、あるいは鎮西学館などで教材に使ったのかもしれない。実際、泰西自由主義が標榜さ

れ民権道徳が教授されていた徳富蘇峰の「大江義塾」では、明治十九（一八八六）年の学科課程によると修身の五級に『西国立志編』が、五〜三級に『西洋品行論』が採用されていたのである。

『SELF-HELP』（一八五九年発行）は、中村正直（号・敬字）によって明治四（一八七二）年七月に『西国立志編 原名 自助論』として訳出版され、福沢諭吉の『学問のすゝめ』（明治五年二月〜九年十一月出版）と共に明治の二大啓蒙書となった。『明治の聖書』と言われ、当時の日本で総計百万部は出たといわれるほどのベストセラーとなった。このイギリスのブルジョア的勤勉立志を説いた『西国立志編』は、近代国家と資本主義の形成期にあつて、封建的な儒教に替わりうる西洋のキリスト教的道徳を教示してくれる書として、多くの青少年に光明を与えた。「天はみずから助くるものを助く」で始まる『西国立志編』、および「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと言へり」で始まる『学問のすゝめ』、両書とも人倫を超越した「天」（西洋キリスト教世界の「神」）の視点を踏まえて書き始められている。

中村正直は明治元（一八六八）年六月イギリス留学から帰朝し、十月、静岡学問所

が開設されると一等教授に任命され、「敬天愛人説」（上・明治戊辰、及び下）を物する。「これは『天』の思想を扱ったもので、キリスト教的なゴッドを儒教思想の天の思想から解釈しようとしたもので、当時のキリスト教思想の受容過程として、また明治以降の敬字思想の出发点をみるうえに重要資料となる」文書である。この著述で、中村正直が日本人として初めて「敬天愛人」を使ったのである。そしてこの「敬天愛人」が西郷隆盛に伝えられた。平川祐弘（東京大学名誉教授）によると、「静岡で中村から訓えを受けた薩摩藩士最上五郎から『敬天愛人説』を伝え聞いた西郷は、天の思想に共鳴した。しかし最初に提唱した中村は、西郷が合点したのとはやや別様の理解をしていた」^④。中村正直にとって『西国立志編』の「天」（Heaven）は、人格的存在としての「神」（God）をも意味していた。

訳出した『西国立志編』（明治四年七月発行）に中村正直が「緒論」（漢文）を書いているが、その中にも「敬天愛人」が要の語として記されている。次の二カ所である。「敬天愛人」の傍・は、筆者（藤本）が施し付記した。

「……為民委官者、必學明行修之人也、有敬天愛人之心者也、有克己慎獨之工夫者也、……」
 （書き下し文……民委官たる者、必ず学明らかに行い修まれるの人なり。天を敬し人を愛するの心ある者なり。己に克ち独りを慎むの工夫ある者なり。）」

「余又近讀西國古今僑傑之傳記、觀其皆有自主自立之志、有艱難辛苦之行、原於敬天愛人之誠意、以能立濟世利民之大業、……」（書き下し文……余また近ごろ西國古今の僑傑の伝記を読み、そのみな自主自立の志あり、艱難辛苦の行いあり、天を敬し人を愛するの誠意に原づき、もつてよく世を濟い民を利するの大業を立つるを觀て、……）」

明治四（一八七二）年、この『西国立志編』が刊行されるや、たちまち全国に流布し、『明治の聖書』といわれる啓蒙書となった。明治六（一八七四）年、征韓論に敗れ鹿児島に下野していた西郷隆盛も、当然この『西国立志編』の「敬天愛人」に改めて瞳目したであろうことは言うまでもない。すでに薩摩藩士最上五郎から中村の「敬天愛人説」について傾聴し、その天の思想に共鳴していたのである。そして、「敬天愛人」

は西郷隆盛の愛誦語として揮毫され人口に膾炙した、そう考えるのが自然であろう。

その後『西国立志編』は『西洋品行論』などと共に版を重ね、自助自立の精神を教授するテキストとして使われ流布した。

遠山院長が構想した九州学院は、「いわゆるミッション・スクールの型と異なった、この日本の国情に最も適したキリスト教主義学校」（稲富肇・遺稿「この宝を土の器に」三四一頁）であり、そこで自身の教育理念（キリスト教主義人格教育）を実現したいというものであった。当時の日本は、ジェーンズの熊本洋学校の時代と同じく、依然として根強い儒教思想や倫理観が残る天皇制の大日本帝国であった。学校では教育勅語が奉読され、近代教育制度を通して皇国道徳が貫徹されて行った。そうした日本の精神風土における教育の場にキリスト教精神を受容していくためにも、中村正直（号・敬字「敬天」）の唱えた「敬天愛人」という語が、創立の精神を表わす校訓としてふさわしかったのである。

九州学院の校訓となった「敬天愛人」は、さらに聖書の福音（マタイによる福音書第二十二章三十七、三十九節の「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽して、あな

たの神である主を愛しなさい。」これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。「隣人を自分のように愛しなさい。」を原典とすることによって、遠山院長が構想したキリスト教主義学校の根幹を支えるゆるぎない建学の精神となったのである。

「敬天愛人」は、キリスト教精神の真髄を表わす校訓として、「自分で自分を監督し、役に立つ善人となれ」の教育指針（自助の精神）とともに、九州学院の百年の歴史の中で脈々と息づき受け継がれている。そして現在、九州学院の教育活動の様々なシーンで、これらの校訓と教育指針の標語が常に掲げられ、その精神が若い魂に注ぎ込まれ続けているのである。

花岡山結盟と九州学院

明治九（一八七六）年一月三十日、花岡山結盟で奉教趣意書に署名した一員に、洋学校五回生の蔵原惟郭（十六歳）と最年少の徳富猪一郎（蘇峰・十四歳）もいた。満

十歳になったばかりの遠山参良は、同じ五回生としてこの結盟の出来事をどのような思いで捉えていたのであろうか。

蔵原、徳富の同期生二人はその後同志社に入学するが、遠山参良も三回生の岡田松生に引き連れられて、同郷で年長の内田康哉らと同志社に入学している。そして熊本バンドの一団に従って、同志社で英語および普通科を修めている。この花岡山の結盟の出来事は、遠山参良の精神の揺籃期における鮮烈な体験となったはずである。

大正四（一九一九）年一月二十八日から三十日にかけて、五高花陵会主催の演説会が海老名弾正（洋学校第二回生）を招いて開かれた。二十九日は九時から九州学院で伝道講演が行われ、続いて十五時から五高瑞邦館で、十九時からは県会議事堂で行われた。後日、花岡山の奉教記念会で奨励も行われ、その時花岡山鐘懸松の前で撮った花陵会特別伝道の記念写真が残っている。海老名弾正と荒川文六に挟まれ遠山参良院長の姿があるが、その他に当時医業の傍ら熊本女学校長に就いていた福田令寿や五高教授で後に日本YMCA総主事となる斉藤惣一、花陵会学生の今中次磨らがいる。今中は後に東京帝大法学部に進み、九州帝大教授、日本政治学会理事長となる。多

路帖熊本教会で洗礼を受けた五十一名のうち四十五名が九州学院の教師と生徒たちであった。その生徒たちが遠山院長に引き連れられて、海老名弾正らとともに花岡山に登ったのである。

一九二一（大正十）年二月十四日、熊本教会から約六十人が転出する形で「九州学院教会」（現・日本福音ルーテル大江教会）が発足し、E・

T・ホールン（Rev. Edward Trull Horn Jr., D.D.）が初代牧師となった。九州学院神学部在学中の高瀬時助（路帖熊本教会出身）は、前年十二月八日に一種の結盟的な霊的集団「献身祈禱団」を組織したが、青年たちの霊的奮起を促すため、熊本バンドに倣って花岡山で熱烈な祈禱をもって発会式を行った。翌大正十年一月には、元旦から八日まで早天祈禱会を開催し、一月三十日の花岡山バンドの記念日には、海老名弾正を迎え花岡山上で献身の奨励を受けた。同年三月、高瀬時助は神学部を卒業すると、九州学院教会の副牧師及び熊本教会補助者として奉仕した。阿蘇湯の谷で聖書夏季学校が始めら



遠山参良院長と海老名弾正

数の五高花陵会学生たちの前に並んで写っているのは、九州学院の生徒たちと間違いない。九州学院神学部の本科学生だった石松量蔵（後・日本福音ルーテル教会牧師、全盲であった）も、自分の位置を推し測るかのように中央に立っている。

九州学院では創設三年目に当たる大正三（一九一四）年十月三十一日に九州学院内の献身志望者で「黎明会」が組織され、教職員及び生徒たちがブラウンを宣教師としている路帖熊本教会へと導かれた。そして、ブラウン司式の下で十五名の九州学院の生徒が受洗した。大正四（一九一五）年一月には、海老名弾正の伝道講演や花岡山の奉教記念会の奨励などがあり、



花岡山鐘懸松前での花陵会特別伝道記念写真（大正4年2月）

れたのは、この年からである。第一回夏季学校は、同年七月二十五日から三十一日まで一週間にわたって行われた。夏季学校の校長は遠山参良院長、同牧師はホルンが務めた。熊本バンドの結盟が行われた花岡山は、九州学院にとっても特別な聖地となっていたのである。

明治九（一八七六）年八月、熊本洋学校二回生が卒業し、同時に三回生も繰り上げ卒業となり、洋学校は五年で廃校となった。ジェーンズは招聘の期限が切れ、十月七日、大阪英語学校外国語教員として赴任するため熊本を離れた。

花岡山の結盟がなされた同じ日に、洋学校内部の儒教信奉者たちはキリスト教信奉者に対抗して細川旧藩公別邸のある水前寺成趣園に結集して反耶蘇の氣勢をあげたが、進歩的実学派の洋学校内部からでさえ、キリスト教に対して排斥・追放の運動が起きるほど、当時は封建的儒教主義が根強かった。ジェーンズが離熊した直後の明治九（一八七六）年十月二十四日には、神風連（敬神党）の乱が勃発する。そうした精神風土の熊本に開明的な洋学校が設立され、画期的な教育によって熊本バンドを始めとする多くの逸材が輩出されたのである。近代日本におけるキリスト教受容の一つの

形がここにはある。

この熊本洋学校における教育理念、及び熊本バンドにおける信仰の有り様が、九州学院の建学の精神の一つの源流となっていると考えてよい。近代日本におけるキリスト教主義学校の原型のようなものを看取することができるのである。

プロテスタントの男子ミッションスクールとして創設された九州学院は、熊本洋学校の、さらには熊本英学校のエデュケーションと精神を引き継ぐ後継学校として、関係諸氏から期待が寄せられていた。渡瀬常吉は昭和十三（一九三八）年十二月二十五日発行の『海老名正先生』（龍吟社）に、次のように記している。

「……海老名先生の傳道は、教會と男女の學校を左右にし、九州の青年男女を渴仰せしめた。此の時代も永くはなかつたが、併し男學校は、今はルーテル派の九州學院が、其の形式上の後繼者となつて育英の業に邁進して」（二八三頁）いる。

熊本英学校跡地に隣接して明治四十四（一九一）年開校し発展していた九州学院

が、海老名から薫陶を受けた渡瀬には、花岡山結盟の精神を引き継ぐ学校として映っていたに違いない。第二の熊本バンドを創出せんとする熱望も籠めつつ…。

〔注〕

(1) 『九州文学』第三十一号付録(明治二十六年一月三十日発刊、九州文学社、熊本英学校内)所収の森田久万人「ヂエンス先生ニ就テノ回想」に、「師ガ平素門人等ニ談話セラレシ人物ノヒトリハ、彼ノ有名ナル英國ノログビー中學校々長タリシトマス・アルノルドノ事ナリキ、是レヨリ師ノ教育ノ目的ヲ推測スルニ全ク書生各自ノ品性ヲ修養スルコトニテアリシ、故ニタトヒ數十卷ノ讀書ヲ爲スモノアリシモ、敢テ之ヲ奨マサズ、亦諸學科ノ奥義ニ功者アルモノアリシモ、殊ニ之レヲ尊シトセズ、然レドモ若シ智情意三性ノ健全ニシテ圓滿ナル發達ヲ遂ゲツ、アルモノヲ見テハ太タシク之レヲ賞嘆セラレタリ…」と回想されている。〔熊本展望〕一九七六年冬季号・第五号所収の(資料篇)より。

(2) 同志社大学人文科学研究所編『熊本バンド研究 日本プロテスタンティズムの「源流と展開」(昭和四十年八月十五日発行、みすず書房)・杉井六郎「熊本洋学校——実学党の理想教育機関——」の一四頁。〕

(3) 小崎弘道『七十年の回顧』第一章 幼年時代、四 洋学校時代(『小崎全集』第三卷自叙伝、昭和十三年十一月十日発行、警醒社)参照。

(4) ジェーンズ著・田中啓介訳「ジェーンズ 熊本回想」(昭和五十三年十二月二十日発行、熊本日日新聞社)・「熊本洋学校・自助教育」の原則」の三八頁。

(5) 同右書の三九、四一頁。

(6) 『S. H. H. P.』は日本では、中村正直(号・敬宇、儒者、明六社員、メソジスト受洗)によって明治四年七月に『西国立志編』(原名『自助論』)として訳出出版されると、『明治の聖書』と言われ、青少年に計り知れない影響を与えた。

(7) 徳富猪一郎『蘇峰自伝』(一九三五年発行、中央公論社)の「熊本洋学校入学と退校」に「先輩のある者は、予に向つて、徳富先生の子ともいわれる者が、さほど覚えが鈍くては怪しからんなどとして、ほとんど予の頭を殴らんばかりに叱り付けた事もあった。その時分から我々と同時に入校したる新入生は、見込みなしとして退校を命ぜられた者が、ほとんど過半であった。(中略)されば予は今後いかなる事があつても、再び洋学校には足を向けまいという決心をした」と、猪一郎は回想している。

(8) 熊本洋学校三回生で、明治十三年同志社卒業後(第一回生)、現在の熊本県八代市鏡町に鏡英

学校（私学岡田英学校）を設立。遠山参良は同年九月、十四歳でその鏡英学校に入学し、英語及び漢学を修めている。岡田はその後、津田仙の学農社教師となり、実業界に転じた。小崎弘道と共に霊南坂教会を創設した十二人の一人で、終生、同教会の忠実な会員で岡田元老と呼ばれた。

(9) この一文は山田清齊編『西郷南洲遺訓』（一九三九年二月二日発行、岩波文庫）によると、「二二」の一文である。「敬天愛人」の思想を端的に解説している全文は次の通り。

「二二 道は天地自然の道なるゆゑ、講學の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに克己を以て終始せよ。己に克つのは、極功は『母意母必母固母我』○論語と云へり。總じて人は己に克つを以て成り、自ら愛するを以て敗るゝぞ。能く古今の人物を見よ。事業を創起する人其事大抵十に七八迄は能く成し得れ共、残り二つを終る迄成し得る人の希れなるは、始は能く己れを慎み事をも敬する故、功も立ち名も顯るるなり。功立ち名顯るゝに随ひ、いつしか自ら愛する心起り、恐懼戒慎の意弛み、驕矜の氣漸く長じ、其成し得たる事業を負み、苟も我が事を仕遂んとてまづき仕事に陥り、終に敗るゝものにて、皆な自ら招く也。故に己に克ちて、賭ず聞かざる所に戒慎するもの也。」（二二―二三頁）

(10) 古川哲史『明治の精神』（昭和五十六年三月二十日発行、ペリかん社）の「敬天愛人」による

と、「…『西郷南洲の語』という説明は、南洲の発明した語という意味なのか、南洲の愛唱した語という意味なのか、そのどちらとも受けとれるが、もし南洲の発明した語というのなら、それはまちがいであろう。南洲は「敬天愛人」という四字を揮毫するさいには、きまつて『南洲書』と署名し、けつして『南洲』とだけですましていない。この『南洲書』という署名の場合は、南洲自身の発明した語ではないのが通例のようである」（二二―二三頁）という。西郷が「敬天愛人」を揮毫するようになったのは、中村正直の『西国立志編』が出版された後の明治七年以降のことである。

(11) 渡部昇一「中村正直とサミュエル・スマイルズ」（サミュエル・スマイルズ著、中村正直訳『西国立志編』一九八一年一月十日発行、講談社学術文庫）によると、スマイルズの四福音書と言われる著書は次の通りである。

* Self-Help (1859) 『西国立志編』（中村正直訳、明治四年七月発行）・『自助論』

* Character (1871) 『西洋品行論』（中村正直訳、明治十一―十三年発行）・『品行論』・『向ふ』

* Thrift (1875) 『西洋節用論』（中村正直訳、明治十九年発行）

* Duty (1880) 『義務論』

(12) 大久保利謙『明六社』(二〇〇七年十月十日発行、講談社学術文庫)の「明六社社員銘々伝」によると、中村正直の履歴は次の通りである。

「明六社員中で毛色の変わったのは中村正直(一八三二―一八九一)で、晩年は江戸川の聖者といわれたように醇乎とした漢学者である。号は敬宇。幕臣ではあるが親の代に旗本の株を買ったというから譜代の士ではない。軽格の家で家は貧しかった。しかし、神童のほまれがあり、しかも大変な勉強家で昌平黉に入って抜群の成績をあげ、昌平黉の教官にあげられ果進して御儒者となった。これは最高の地位である。漢学者であったが洋学に関心をもち、ために浪士輩から国賊よばわりをされたという。慶応二年(一八六六)幕府のイギリス留学生の監督として渡英した。その帰朝(明治元年)の際イギリス人の友からスマイルスの『エッセイ』を記念に贈られ、船中これを耽読して感激おこあたわず、ついでこれを訳して明治四年(一八七二)『西国立志編』と題して刊行した。当時中村は静岡藩(徳川家に従って静岡にいた)学問所の教授をしていたので静岡で出版したのである。これは明治の聖書といわれたほどよく読まれた。イギリスのブルジョア的勤勉立志を説いたもので、当時の日本の青年にも好適の近代倫理書であった。中村はこのほかミルの『自由之理』も訳出した。明治六年(一八七三)東京小石川江戸川の畔に同人社をおこして福沢諭吉の慶応義塾と並び称された。なお彼はキ

リスト教に心服し、『擬泰西人上書』を発表(明治五年『新聞雑誌』五六号に掲げた)。これは匿名であったが中村のもので、またキリスト教が禁じられていた時に大胆にキリスト教を弁護して、天皇も受洗せよと書いた。『陛下もし果して西教を立てんと欲せば、即ち宜しく先づ自ら洗礼を受け、自ら教会の主と為り而して億兆唱和すべし』(原漢文)と書いた。当時として随分思いきった発言ではないか。それだけではない、中村みずから明治七年カナダメソジスト派の宣教師カックランから洗礼を受けたという(小沢三郎「中村敬宇と擬泰西人上書」―『大隈研究』第二参照)。これは中村が儒教の天の思想とキリスト教のゴッドを結びつけたからであった。後年文部省の嘱で書いた「教育勅語」の原案が不採用となったのもこのような天の思想を中心としたからであったが、これも西洋思想の一つの受け入れ方であろう。かくて明六社員中、中村と西村茂樹は主として精神文化の面を受けもったのである。文学博士、貴族院議員となった。」(二五一―二五三頁)

(13) 『明治啓蒙思想集・明治文学全集3』(昭和四十二年一月十日発行、筑摩書房)・大久保利謙「解題」四四八頁。

(14) 平川祐弘「天ハ自ラ助クルモノヲ助ク 中村正直と『西国立志編』」(二〇〇六年十月十日発行、名古屋大学出版会)四七頁。

(15) (11) の『西国立志編』(講談社学術文庫) 五三頁。

(16) (11) の同前、五四頁。

(17) 遠山参良院長愛用の聖書は、『舊新約聖書』(文理・上海製書公會印發、BRITISH AND FOREIGN BIBLE SOCIETY, Shanghai, 1926 (Ed.2356), Werni Bible, Delegates' Version.) である。その漢文聖書(遠山参良先生遺本蔵書)九州学院所蔵)の「馬太 第二十三章」の三十七、三十九節は、次の通りである。

「三七耶穌曰、當一心、一意、愛主爾之上帝、三八此誠之首而大者、三九其次、愛人如己、亦猶是」。

新共同訳聖書の、「イエスは「耶穌」、「神」は「上帝」、「隣人を自分のように愛しなさい」は「愛人如己」と記されている。「上帝」は「天」と同義であり、まさしくこの箇所は、「敬天愛人」を表わしている。

(18) 徳富蘇峰は後に棄教することになるが、(7)の自伝中「花岡山バンドと予」で、「いわば実学党の殻からおどり出すために、その仲間に加わった迄にて、それ以上の意味はなかった。(中略)予はかねての気質にて、一度やりかればゆくところまではゆくという決心であったから、後まで踏止まったのである。それで予も花岡山の連盟者の一人として、記憶せらるることになった。しかし予の真意は今申す通り、深くキリスト教を研究して、それを信じたのではなかつた。

た。もとよりキリスト教のために一生を捧ぐるという了見は、露程もなかった。ただ他の者がやめるから、意地にもやめずにいたのであった」と、やや自嘲ぎみの述懐をしている。

(19) 一八六五(慶応元)年旧八代郡電北町生れ。東大法科卒業後、外務省に入り行使、大使として欧米やロシアに駐在。明治四十四年第二次西園寺公望内閣の外務大臣、南満州鉄道總裁、枢密顧問官を歴任。貴族院議員に勲選された。遠山参良より一歳年長である。

(20) 花陵会一〇〇年史編集委員会『五高・熊大キリスト者の青春—花陵会一〇〇年史—』(一九九六年十二月一日発行、熊本大学Y M C A花陵会)「第四部 資料編、四、伝道活動記録」参照。

(21) 同右書の口絵写真(大正四年二月、花岡山鐘懸松の前で)。海老名や遠山の他に、齊藤惣一、福田令寿なども写っている。

(22) 吉田作弥(後にキリスト教に回心、同志社に学び熊本バンドの一員となり、神戸女学院副院長)を大將に、横井時敬(農学博士、東京農業大学長)、岡田源太郎(同志社に学び熊本バンドの一員となる)、郡徳隣(後に海老名弾正より受洗)などを中心とする三十六、七人であった。(三井久著、竹中正夫編『近代日本の青年群像 熊本バンド物語』一九八〇年六月三十日発行、日本Y M C A同盟出版部、一六三—一六六頁参照)

(23) わたぜつねよし、一八六七—一九四四年。熊本県八代出身、大江義塾で学び、十八歳で受洗。

日本組合基督教会牧師。一九一〇年日韓併合後、朝鮮植民地伝道を展開。著書に『朝鮮教化の急務』（一九一三年）、『日本神学の提唱』（一九三四年）等がある。

熊日新書『ジェーンズが遺したもの』（二〇二二年三月一四日発行、

熊本県立大学編著、熊本日日新聞社）より